

百聞は一見にしかず

石川県立金沢桜丘高等学校 二年 後藤 宏美

「情報に対し受け身でなく行動を取れるようになって思う。」これは去年の夏、〈地球に暮らす一員としてできること、考えること〉というテーマについて書いた原稿の最後の一文であり、去年一年間の私の行動の柱になったものだ。私は「まず行動を起こそう」と思って入ったボランティアサークルの紹介で、チベット族でインドの亡命自治区在住の「デキー」という少年とメールを交わすことになった。チベットは今年三月十日の自治区ラサの僧侶による抗議でもを皮切りに、今も数々の暴動が起きている場所だ。ニュースでも、チベット族の人達の抗議活動

を中国の武装警察が暴力や発砲で鎮圧して、数百人の死者を出した等と報道されており、私は不安だった。

お互いの国の言語が分からないため、私達は両者不慣れな中国語でメールを交わすことになった。翻訳サイトと辞書で内容を解読する日々。上手く内容が解らない状態で言葉を交わしていくうち、私は自分が酷く偏った先入観を持っていることに気が付いて愕然とした。

私はチベットというと、寒冷な日の少ない山岳地帯というイメージを持っている。暴動が起き、中国軍が常に見張っていて、人々はとても苦しい生活を送っているのだと。しかしテギーと言葉を交わしているうち、生活は苦しいけれどそのことが苦にならない程に、チベットの人は自らの文化と思想をとて誇りにしていることが分かった。古くからある歴史や素晴らしい指導者を持っていること。それはチベットの人にとって、何ごとにも代えがたい誇りであるのだ。私は無宗教である。正直「国が何よりも大切だ」という気持ちは理解し難かった。けれど、本当にチベットの人が国と自分達の仲間を愛していると感じられた。

学校の友達とのような話をしてきたメール。だが今もチベットの独立運動は加速している様子で、時折軍の暴挙について書かれた内容の時がある。テギーの家

の隣りの学区で、生徒を迎えに来た親に軍人が発砲したということや、夜中に僧侶が連れ去られ酷い拷問を受けているという話。私は酷いと思い、痛そうだと感じた。だが、どんな痛ましい状況が伝えられても、余りにも普段の生活からはかけ離れており、私は全く実感が沸かなかつた。勿論痛めつけられる人はとても可哀そうに感じる。だが、やはり頭の何処かで「他人ごとだから」と思っていた。私は日本という安全な場所にいるから、同情しかできない。現地にいって助けることも出来ない。そんな考えではいけないとは分かっていたが、そう簡単に命の危険ということ具体的には考えられなかつた。

そんな自分への嫌悪感に包まれていた時、私はJICAからタイへ研修旅行に行かせて貰った。タイはとても発展してきている国で、新しい商業ビルやマーケット等、見るからに娯楽的な施設が一杯あつた。だが、私の記憶に残つたのは、巨大ファッシュンビルに連なる高架線の隅で、裸の赤ん坊を連れて物乞いをしている六歳程の少女の姿だつた。通り過ぎる人の波の中で、赤ん坊を抱えながら懸命に腕を伸ばしていた少女の姿。私はポケットに入っていた小銭を渡すべきか迷つた。何も知らない外国人が、事情も知らずにむやみにお金を与えてもいいのか分からなかつたのだ。あつたのは高々百円。本当は渡すべきだつたのかも知れない。

しかし私は渡せなかった。

二人から感じた私に必要なことは「人の苦しみを理解すること」だ。少女の苦しみを見て気付いた、チベットの人の苦しみ。私は悲惨な情報を知っていても、困っている人達の姿を思い浮かべられなかった。自分に危険は起これないと思つて、困っている人も思いを考えようとしないうちに大変なダメ人間だ。だから、私はもつと人の苦しみを理解するために、世界を知ることから始めようと思う。そして、日本の人々がどうすれば他人の痛みを知ることが出来るのか、もつと考えていこうと思う。